

「おたく」の精神史

一九八〇年代論

大塚英志



^{あいろ}「隘路」にはまったこの国の
“現在”を理解するために

大塚英志が語る、私的1980年代論

||

「おたく」文化論

80年代と現在をつなぐ「序章」と「終章」、計27000字を書き下ろし!



早坂未紀「萌」

「おたく」の精神史

一九八〇年代論

大塚英志

星海社

78



SEIKAISHA
SHINSHO

見えない文化大革命 外国の人たちによせて

日本の外側で、あるいは日本語以外の言語によって書かれる〈オタク〉(と、ぼくは今、日本語の片仮名によって表記をしているが、この語を記す時、〈おたく〉と平仮名表記することと、そのどちらを選択するかは、この用語の社会的文脈に関わる重要な問題であるが、日本語以外の表記では、まず、その問題が脱落する) についての言説は、皮肉をたっぷり込めて言うなら、「外国」では極東の島国に〈サムライ〉〈ゲイシャ〉〈ニンジャ〉に加えて〈オタク〉という奇妙な社会集団が存在し、この島国の伝統ないしポストモダン的な何ものかに根差している、と信じられているようにさえ思える時がある。そのような事態に自己言及するカップ麺のCMが殊更、議論や特別な反響を呼ぶこともなく流れるほどに、その違和はこの国ではささやかな諧謔とともに共通感覚となっている。だから、それは新しいジャポニズムに過ぎず、クールジャパンなる言説はその醜悪な鏡像を「日本」自身が自画像とする倒錯の上にあるとあなたたちに語ることにさえ実は空しい。だからぼくはいつそ、そういう誤解という名の期待に応えて、かのアラン・ソーカル論文偽造事件を模して、例えばカントでも持ち出して「おたく」的体系とは日本における近代の遅延によってようやく成立したカント的体系としての中産階級的

思考ととるべきであり、他方へオタク」とはそれに対して「物自体」への理解不可能性の意識の高まりという二律背反に耐えきれず、むしろ「物自体」の背後にある「崇高さ」への憎悪を生みながら、しかし彼ら自体が「萌え」という理解不可能性に縋らざるを得ない存在である」とでも書き始めるフェイクの論文をあなたたちのために海外の雑誌に寄稿すればいいのだろうか、という気にさえなる。別に引き合いに出すのはデリダでもフーコーでもレヴィ・ストロースでも何でもいいのだが、海外で語られるポストモダンなオタク論の多くは「無自覚なソーカル論文」の域を少しも出ない。

それほどに現在の「へオタク」をめぐる言説は無駄で無意味なものにばかりには思える。いや、思えるでなく、無駄で無意味だと断定すべきだろう。

例えば西欧の人々は日本を含む非西欧的文化圏には、相手が自分に望むステレオタイプやラベリングを自ら期待通りに演じて見せて文化的摩擦を回避する、という処世術があることにもう少し気づいてくれてもいいと皮肉を込めて記す。日本人の手による「へオタク」をめぐる言説は「海外向け」に意識してカスタマイズされているものが少なからずある。いわば、西欧の望む「へオタク」を西欧にプレゼンテーションしているわけだ。しかし、このような「控え目な批評性」とでもいうべきものさえ、近頃では日本の内側では不成立になりつつあるのも確かである。つまり「へオタク」論に限っても、西欧的文脈に合わせて日本の側がそれを語

る倒錯が、もはや倒錯として若い日本人の語り手の側にさえ理解されない、という事態が少なからず生じているのだ。

そもそも「へおたく」やその「文化」が学術的思考の対象になること自体が、「冗談」が「本気」に転倒してしまったこの三〇年間に日本で起きた、ぼくが近頃では「見えない文化大革命」と皮肉を込めて述べ懐する事態のもたらしたものだ。それがぼくがこのエッセイで強調したい一番のポイントだ。「日本」の「現在」は、極東の島国で、一九七〇―八〇年代に起きたある種の「文化大革命」の達成なのだ、と、これは「冗談」としてではなく、本気で記す。

ここで比喩として中国における「文化大革命」(一九六六―七六年)を持ち出すのは無論、肯定的な意味においてではない。「文化大革命」は旧文化や文化ヒエラルキー、教養を無目的に破壊し、当時はその「破壊」を「世界同時革命」の一部と見なす視点が日本国内にも幾許か存在していた。

その「破壊」の仕方を含め、八〇年代に「へおたく」文化の台頭として受け止められる現象は、「へおたく」世代より一世代上の「全共闘世代」の手による「見えない文化大革命」の成果だというのが、あの時代を言い当てるかなり正確な比喩のようにぼくには思えるのだ。そしてぼくたち「へおたく」第一世代はその忠実で愚かな紅衛兵こうえいへいだった。それが、ぼくがこれから語ることの全てだ。

その時重要になってくるのは「おたく文化」の台頭を日本の左翼運動史の文脈でとらえ直す視点だ。

つまり第二次世界大戦後の日本で二度に渡って起きた、六〇年安保闘争と七〇年前後の全共闘運動という、二つの学生運動にそれぞれ頓挫した人々が、「おたく」文化の成立以前のサブカルチャーの思想的な擁護者だけでなく、「おたく」第一世代（一九五〇年代後半〜六〇年頃に生まれ、七〇年代全共闘運動の敗北の姿を少年期にぎりぎり目撃した世代）が活動すべきステーションやジャンルを作っていた、という事実こそがもう少し考えられていい問題なのだ。例えばぼく個人の経験に基づいても、ぼくが編集に関わった雑誌を作る「環境」はぼくが「作った」ものでなく、上の世代に「与えられた」ものに過ぎなかった。そのことをぼくの責任を回避するために記すのではなく、自らの愚かしさを述懐する意味において書かざるを得ないのである。

ぼくたちの上の世代、学生運動の敗北者たちは、社会に出ると日本の産業ないしはメディアのヒエラルキーの「最下層」である子供文化産業や、資本主義の走狗たるマーケティングビジネス、あるいは映画に比し、TVという社会的地位のまだ低かったマス・メディア、更には、ポルノグラフィイ雑誌や「ピンク映画」などのアンダーグラウンドなメディアに生きる糧を得ることになった。ぼくたち「おたく第一世代」はその後にやってきて、彼らの作っ

たステージでいわば「放任」された世代だ。その「放任」の意味については後述する。

例えば、徳間書店『アニメージュ』で編集長として中心的役割を果し、ジブリを創設した鈴木敏夫は慶應大学時代、新左翼セクトに関わったことをぼくのインタビューの中でカミングアウトしている。

鈴木が慶應大の自治会に関わった時の述懐である。汚い自治会の部屋を「女の子も来れる」きれいな自治会にしようと清掃し壁紙まで張り替えた次の日の出来事だという。

〈次の日行ってみたら、きれいにしたその夜、その部屋でリンチが起きちゃったんですよ。法の政の学生だったんですけれどね、1人がもう血だらけになっちゃって、集団でそういうことが起きちゃって、これは大変だななんていうことがあって、それで壁じゅう、壁と床が血だらけでね、もう大変だったんですよ。そういうするうちにね、羽田闘争なんですよ〉

(鈴木敏夫インタビュー)

このような左翼セクトの「内ゲバ」や「リンチ」の終結点が連合赤軍事件である。鈴木はこのような「運動」から徐々にフェードアウトしつつ、「子ども調査研究所」というマーケティング会社のリサーチャーになったという。この子供をリサーチの対象としたマーケティング研究所は「東大全共闘の関係者で大学院に戻れなかった人々が調査員と称して集まりつつ政治活動もやっていた」(鈴木)という組織だが、八〇年代サブカルチャーの出自の一つとして

実は重要な存在のように思う。

そして鈴木敏夫における「学生運動」と「マーケティング」という一見矛盾する思考の転換は、八〇年代に入ると全共闘運動のアカデミズムでの「生き残り」の人々による「ニューアカ」と、「広告代理店」の「野合」のいわば前史として考えればむしろわかりやすい。しかし、それだけでなく、この「子ども調査研究所」に集まった人々の固有名が興味深い。

七〇年全共闘運動の終結していく中で、この研究所にリサーチャーとして関わったのは先の鈴木敏夫だけでなく、『ロッキング・オン』の創刊メンバーとなる渋谷陽一、あるいは橋川幸夫、まんが批評家として知られるが、関西の大森一樹や村上春樹などもその周辺にいたミニコミ誌『プレイガイドジャーナル』に関わった村上知彦などがある。少し上の世代には真崎守作画の全共闘運動をモチーフとしたまんが作品『共犯幻想』の原作者齋藤次郎がいて、彼はのちに児童文化評論で知られ、現在の「まんが評論」の一つの起源にもなる。

「新左翼運動」と「おたく」文化の関わりについては、いつも持ち出す例だが、『機動戦士ガンダム』、いわゆる「ファーストガンダム」がキャラクターにイスラム名を含み「約束の地」を主題としていることと、富野由悠季が元赤軍メンバーの足立正生の後輩であること及び安彦良和の新左翼としての活動歴は当時の青年にとってありふれた経験だとしても、やはり結びつけられるべき問題だ。パレスチナ問題がファーストガンダムの下敷きにあるのは、最初

にTVでこのアニメを観てぼくを辟易させた最大の理由だ。『ガンダム』は転向左翼の文化として捉え直すべきだ、ということはかつて論じたので繰り返さないが、ぼくが『ガンダム』に当時も今も全く「乗れない」のは、安彦がクルド族の内戦をテーマにした作品を描いたことも含め、彼らは自分たちが敗北した運動の代償行為をあたかも自分たちにものみ「わかる」かのようにアニメやまんがの中で「隠語」として描き、しかし、それが透けて見える下の世代としては、何よりその点にうんざりしたからだ。描くなら正面から描けばいいのに、とぼくはいつも感じていた。鈴木敏夫は『アニメージュ』の誌面を八〇年代の初め、ファーストガンダムの二作めの劇場版公開の夏、『ガンダム』至上主義から宮崎駿みやざまはやおにシフトする。それもまたぼくには『ガンダム』という新左翼敗北文化から宮崎駿という未だ終わっていない旧左翼への「再転向」のように見えた。

日本の思想史においてはマルクス主義青年の「子供文化」を介しての穏当な転向は、戦時下の小熊秀雄くまひでおら詩人たちが、児童書の統制に関わる形で内務省のコントロール下に入っていた例を含め、一つの日本における「転向の形式」であることは注意していい問題だ。

一方「エロ本屋」と呼ばれたポルノグラフィの出版社も六〇年代、七〇年代の転向左翼青年の「受け皿」として相当の役割を担っていた。

だから今でも思い出すのが、ぼくがこれらのメディアの内側に入っていた八〇年代初頭、

年上の編集者たちの「属性」は彼らの六〇年代安保におけるポジションや、六〇年代末から七〇年代初頭に彼らが所属した新左翼のセクトの名称とともに常に語られたことだ。『漫画ブリッコ』の発行元のセルフ出版の編集者の中にも新左翼セクト出身者がいた。彼らはそれをぼくたちには隠したつもりで、アニメ誌やおたく雑誌という彼らが全く価値を見出していなかった「場」で、ぼくたちと戯れるふりがある種のニヒリズムとして演じ、あるいは自らも「面白主義」などといった「サブカルごっこ」に興じていた（どうでもいいことだが「サブカル」と「おたく」の違いはその起源が全共闘世代か『ガンダム』以降の「おたく」世代にあるのかに求められる）。読者であった時はそれに惹かれもしたが、その内側に入ったことで政治転向者としての彼らの醜悪な姿を見てしまうことになる。そのことがぼくたちの世代の物書きに「政治性への嫌悪」を潜在的に植えつけた、と言っている。ぼくらの年代の一部にある「左翼への嫌悪」のもとを辿ればこのあたりにいきつくのかもしれない。

些細なことだが、ぼくたちのように、一つ上の世代の左翼経験の存在を感じとった「六〇年代以前」生まれの世代と、わずかの差でそれを感じとれなかった「六〇年代以降」生まれの世代の中に「政治性」をめぐる感覚の大きな乖離があることは指摘しておく。「六〇年代以前」生まれの批評家、つまり、宮台真司^{みやたいしんじ}、香山リカ^{かやま}、福田和也^{ふくだかずや}、坪内祐三^{つぼうちゆうぞう}らが「へおたく」や〈新人類〉と呼ばれた新世代でありながら、むしろその後「五五年体制的なりべラルと保守」

にきれいに分化していく「政治的選択」の背景にさえ、このことが見出せるだろう。

これ以上のディテールは記さないが、へおたく文化と日本の左翼運動の連続性についてはもう少し誰かが研究しておいてもいい。

その場合、七〇年全共闘運動そのものが、大衆化し始めた「大学」における「大学生」という「新しい大衆」に担わされた、一種のポップカルチャーであったことはしばしば語られることとはいえ、やはり見逃すべきではないだろう。例えば鈴木敏夫は羽田闘争に先んじて慶應の自治会によって担われた「闘争」が、学食のカレーライス値上げをめぐる種の「ごっこ」であったことを批判的に回想するが、彼らは何より「ポップカルチャー」という無意味な文化を政治的な「カウンターカルチャー」と見なして、資本主義や社会システムへの批判のツールとして利用するのが特徴的であった。例えば、白土三平しらとさんべいの「劇画」に階級闘争的な主題を見出す、という過剰な「読み」にそれは明確に現われている。「ヤクザ映画」を「反体制」として賛美するのも同じ文脈である。そのような原則が、ぼくたち一世代下の文化にも「適応」された印象がある。

しかしそもそも辰巳ヨシヒロたつきの『劇画漂流』が語る通り、「劇画」は大学生ではなく、むしろプロレタリアートの若者たちによって作られたものだった。「団塊世代」と呼ばれた戦後最初のベビーブーマーたちが、「大学生」と一方では集団就職による中学卒業の若者たちに階層

化していき、その「階級」の固定がその後進行していったのが現在の日本で再び顕在化した「格差」の本質だ。しかし「劇画」は七〇年代全共闘運動を介して、「労働者階級」の文化から大学生たちホワイトカラーの子弟文化へと変容する。その結果、劇画は八〇年代以降、脱政治化、体制化する。団塊世代の「大学生」であった劇画家の弘兼憲史ひろかねけんしが、今や学生時代から左翼を懐疑していたという「設定」のもと、日本のネオリベリズムを代表する文化人としてあることはその意味で象徴的である。その意味で「転向文学」としての『ガンダム』が日本社会におけるナシヨナリズムの復興にどう作用したかも、ようやく近頃、安彦の「反省」が語られたとはいえ、これも検証されていい問題だ。

このように全共闘運動の「敗者」たちは、七〇年代以降、様々な形で子供文化ないしはサブカルチャーの「担い手」の側に回っていく。

その時、サブカルチャーには二つの文脈が彼らによって与えられる。

一つは、先に触れたマーケティング的な文脈である。資本主義システムを相対化しながら、しかし、あらゆるものを商品として見なし、同時に、大衆も操作可能な消費者と見なす態度である。これは現在のwebにおいて、人々を「ユーザー」と一義的に定義する出発点でもある。日本のおたく文化において、何故、八〇年代以降、メディアミックスというビジネス的側面のみが極端に拡大していったかという問題を考えるには、このような事実の確認が必

要である。八〇年代以降の日本の「へおたく」文化のイデオロギイの支柱は、極端に言えば「マーケティング」にある。それが最後の章で述べる「おたく文化」の「エコシステム」への回収の下地をつくったと考えていい。そして文化としての内実の空虚さを贖^{あがな}うために「へおたく」文化は殊更「伝統」と結びついたがる傾向にあるといつてよいだろう。

二つめは、しかし、このような資本主義との野合にも拘^{かか}わらず、サブカルチャーを未だ「体制へのカウンター」として見なすメンタリティーが全共闘世代の転向者の中に共存していたことである。

この矛盾した二つの思考法はそのまま、一つ下の世代の「おたく」第一世代の批評の基本的な枠組として援用された、といつていい。ぼくたちは彼らの「転向文化」の所詮はエピソードに過ぎない。

ぼくが「物語消費論」が電通及び角川書店のために本来作られたマーケティング理論ではないことを常に強調するのは、その過程で八〇年代における「転向」後の風景、つまり全共闘世代の思想的流行としての現代思想（構造主義やポスト構造主義）とマーケティングの「野合」の現場を具体的に目撃したからだ。八〇年代の日本における「現代思想家たち」は、大半が広告代理店のサポートを受けていた。全共闘運動の新左翼的言説は、『現代の眼』や『流動』などの総会屋系メディアが支えたが、八〇年代ニューアカは広告代理店やNTT建築会

社がパトロネージュする雑誌によって展開した。だから鈴木敏夫が自分のマーケットとしての側面を殊更強調するのは何故なのかは、同じ文脈で、考えられなくてはいけない問題だ。マーケティング理論の八〇年代における流行もまた、日本における「転向の形式」の一つであったと考えていい。

もう一つ、サブカルチャーをカウンターカルチャーと見なすメンタリティーの問題がある。そこでは八〇年代においてマルクス主義に代わる思想が、ボードリヤールに代表される文化記号論であったことを忘れてはいけない。

全共闘世代とそれに先行する政治的世代は、文化ヒエラルキーの下位にあるサブカルチャーを反体制のツールとするという基本的な戦略を転向後も継続した。そのことが八〇年代に台頭してきたアニメーションやまんがなど「子供文化」の「若者文化」化という事態に対する、彼らの積極的加担の「方便」となっていた。彼らはマルクス主義は放棄したが、何らかの体制の変革を求める、曖昧な革命家としての野心を捨て切れなかったというのが身近にいた多くの見立てだ。

その時、マルクス主義に代わって彼らの理論となった文化記号論に准じて表現すれば、文化の記号論的攪乱、とでもいふべき事態を欲望したのである。それは「下位と上位のヒエラルキーを無効化するために無意味なサブカルチャーの台頭に加担する」というある種のマー

ケティンク戦略と結びつく。

例えば六〇年代安保の世代としての筑紫哲也ちくし てつやによる『朝日ジャーナル』上での「新人類」概念の提示はその好例である。「新人類の旗手たち」と題された、この連載インタビュー企画は「若者たちの神々」という連載インタビュー企画に続いてなされたが、「神々」シリーズのインタビューの対象者がその時点で、文学賞やアカデミズム、経界などの既存のヒエラルキー内部の若い成功者が対象であったのに対して、「新人類の旗手たち」は、その時点では何も為し得ていない単なる若者たちに記号としての、今ふうに言うなら「タグ」として「新人類」の名を与えることで成立していた。インタビューの対象者を記号操作によってスマートに捏造した、といえる。『朝日ジャーナル』という旧ヒエラルキー内のブランドが文化ヒエラルキーを「左翼」的に無効化するために「何も為し得ていない若者」に彼らの「権威」が保証する形で無根拠なタグ付けをしたのである。「何でもない」存在がタグ一つ、ロゴ一つでブランドになる、というのは八〇年代において新人類からDCブランドに至るまで共通の思考であり、それは記号の操作によって既存の価値を無効化し、新しい価値を創造できるという詐術としての文化記号論に準拠していた。だから「新人類」という「タグ」を筑紫は乱発することで、ヒエラルキーの無効化という欲求に彼がどこまで自覚的であったかは別として、はつきりとそれに、加担したのである。

しかし、言うまでもなく、このような「ヒエラルキー崩し」は、現実にはこのような左翼的文化戦略によって単純に進行したのではない。そこには八〇年代における一億総中流化、即ち「階級」の見せかけの消滅という神話が作用した。「労働者階級」に代わって「大学生」が日本の大衆文化の主流の消費者となっていたことに始まり、本来「教養」の担い手としてあるべきだった「大学生」が、単に文化の消費者へと変容していく中で、サブカルチャーは「労働者階級」の文化としての大衆文化ではなく、「中間層」の消費文化へと変化した。それが市場化していく過程の中で、先に述べた、「劇画」の「ホワイトカラー文化」化がまず起きて、そして、他の分野へと広がった。その次に登場した、六〇年前後生まれの世代（つまりおたく第一世代）が「子供文化」としてのまんが・アニメを長じても手放さずにいたことで、市場として顕在化していくという状況を生む。具体的には八〇年代前半の『アニメージュ』などのアニメ誌や、『漫画ブリッコ』などの「萌え」の起源の雑誌が商業的に成立可能となる。

既に記したように『アニメージュ』などのアニメ誌や、ぼくの関与した『漫画ブリッコ』などのメディアの登場は、全共闘世代が「おたく」第一世代に活動の場を提供する、という形で起きた。その共犯関係をこそ告白しなくてはいけない。その詳細は改めて別の書で記すが、〈おたく〉第一世代は現在でいう非正規社員としてメディアの世界に参入する。ぼくもその一人であるの言うまでもない。実体としての彼ら（あるいはぼく）は単なるアルバイトだ

つたが、上の世代の「文化の転倒」への思考と共犯関係に置かれる中で、いくつかのメディアを自分たちの文化の容れ物にすることに成功した。『アニメージュ』『漫画ブリッコ』を含むへおたく系メディアもそうやって部数を伸ばしていった。だが、その結果、ぼくらは転向者としての旧世代が文化ヒエラルキーの解体を目論んだ「見えない文化大革命」における愚かな紅衛兵として、喜々として旧文化を破壊しまくったに過ぎない。無論、それらの多くは壊れてしまっても一向に構わないものだった、とぼくは今でも思っているが。しかし、ぼくたちは上の世代の「革命」に無自覚に加担して、ただ、はしゃいだことは事実なのである。

しかし、その結果、へおたく系的サブカルチャーが社会の表層に現われるようになっていく。ハイカルチャーやアカデミズムは衰退し（無論、衰退する方にも責任がある）、サブカルチャーが不在のメインカルチャーの座に半ば入れ替わっていく。

実は、こういった事態そのものは当時、保守と左翼の双方から批評的に記述された。江藤淳は文学がまんがなどの下位文化に反転する事態を「文学のサブカルチャー化」と呼び、吉本隆明は下部構造がもはや上位文化を決定し得ない事態として「重層的な非決定」と呼んだ。この二人の戦後史を代表する思想家が、「見えない文化大革命」を消極的か、積極的かの違いはあれど、何故、擁護したのかは興味深い問題だ。吉本と埴谷雄高の「コム・デ・ギャルソン論争」などは、こういった「見えない文化大革命」の一つの局面として捉え直した方がよ

い。今になって、お笑い芸人が「芥川賞」をとったことを嘆いても、吉本も江藤も苦笑いするだけだろう。そんなことは苦渋と諧謔を以て江藤と吉本がとうに予見していたことではないか。

そして構造主義ないしポスト構造主義や記号論の援用による、ヒエラルキーの相対化の戦略として、日本文化全体のサブカルチャー化と共犯関係的に関わったのが、先に述べたマーケティング理論化した現代思想（つまり、ニューアカ）である。構造主義は本来、西欧における白人文化中心主義や硬直思考の相対化の手法だったが、非西欧的であり、同時に公共性や、西欧的な近代的個人の形成にむしろ頓挫し続けていた「日本」社会にとつては、そもそも構造主義による「相対化」は必要のない戦略であった、とぼくは思う。上野千鶴子うえのちづこはかつてこれをマルクス主義的な階級闘争としての「垂直の革命」に対し、「水平の革命」と呼んだ。そして「水平の革命」は「一億総中流化」と整合性があった。経済的にはなく記号的に平等化することで「一億総中流化」という幻想は可能になるのである。「一億総中流化」とは何よりこの国の大衆の大多数が自分を「中流」だと思ふことで成立する。その「思い込み」は例えば消費する記号の水平化、例えば田中康夫たなかやすおが揶揄したような、丸井のクレジットカードで誰でもDCブランドを等しく纏えることで支えられる。

そのことは吉本隆明のコム・デ・ギャルソン論争での以下の発言に端的に見てとれよう。

埴谷雄高はコムデギャルソン姿で『an・an』に登場した吉本隆明に、アジアの労働者からの搾取から成り立っている商品を纏っていると皮肉を述べた。これに対して吉本は以下のように反論した。

〈「アンアン」という雑誌は、先進資本主義国である日本の中学や高校出のOLを読者対象として、その消費生活のファッション便覧の役割をもつ愉しい雑誌です。総じて消費生活用の雑誌は生産の観点と逆に読まれなくてはなりません。この雑誌の読み方は、貴方の侮蔑をこめた反感と逆さまでなければなりません。先進資本主義国日本の中級ないし下級の女子賃労働者は、こんなファッション便覧に眼くばりするような消費生活をもてるほど、豊かになったのか、と
いうように読まれるべきです〉

（吉本隆明『重層的な非決定へ』）

日本の「女子賃労働者」がコム・デ・ギャルソンや『an・an』が象徴する消費文化の受容者たり得ることを吉本はいわば「一億総中流化」という「革命」の成果として受け止め、この後の吉本は徹底した「中流幻想」肯定論者となる。このことを吉本は後に「転向」と自ら形容している。

吉本の言説には彼らしい大衆への「善意」があったが、八〇年代の文化記号論的な言説やポスト構造主義的言説は、何よりそれら「現代思想」というハイカルチャーの言説によって下位文化を語るという行為自体が、文化ヒエラルキーの混乱ないしは解体を宣言するゲーム

でしかなかった。それはもはや学生でなくなった全共闘世代の未練がましい、終りそこねた「反体制運動」であったといえる。

そのようにして、もともとさして強固でもなかった戦後日本社会の「文化ヒエラルキー」の崩壊が始まったのである。

「新人類」という「タグ」によつて何者でもない若者が一瞬にして社会的権威と同列になる。同じように少女まんがやプロレスを現代思想によつて語ることで、アカデミズムが解体する「かのような」錯覚に囚われる。プロレスについて記号論的に語ったロラン・バルトの日本における悪影響（ぼくも引用した）は、思いの外大きいのである。言うまでもなく紅衛兵としてのぼくたちは、本当に喜々としてバルトのようにボードリヤールのように山口昌男やまぐちまさおのように語った。恐らく「おたく」世代の大半は、今でもやろうと思えばバルトのようにあるいはボードリヤールのように「初音ミクはつね」も「ラノベ」も「萌え」も語るができるだろう。無論、それは単に質の悪い「冗談」であつたが、その行為そのものが文化ヒエラルキーへのあつた種の「批評」なのだ、という方便とともにぼくたちは「冗談」を語つていたのである。

だから、ぼくがぼく自身の八〇年代の批評を、まず何よりただの「冗談」だと語らざるを得ないのは、上の世代の「文化大革命」に対して、ぼくたち自身が、とるに足らぬサブカルチャーを現代思想というハイカルチャーのレトリックで語つてみせることで、価値の攪乱と

いう彼らの遊びに愚かにも参画した責任があるからである。しかもこの「文化大革命」の前に近代日本の文化ヒエラルキーはひどく脆かった。その「脆さ」はまた別の問題だが、八〇年代の「文化大革命」による廃墟の果てに「反知性主義」などとこの国で言われる現在の始まりがあるといえるだろう。その「反知性主義」を象徴するのが現在の政権やweb上のネットウヨ言説だということはしばしば言われるが、それは「見えない文化大革命」の成果なのである。安倍政権を可能にしたのはこの「見えない文化大革命」であるとすればこの政権と今の「オタク」の親和性も納得がいく。彼らもまた無自覚な紅衛兵なのである。

へおたくの話の出自については中森明夫なかもりあきおが八〇年代の半ば、ぼくが編集していた『漫画ブリッコ』誌上でへおたくの概念を提示し、ぼくはそれが批評ではなく、むしろ「差別」用語だと批判したことが事実の全てだ。その背景には「記号」というタグ付けによって社会的立場を得ようとする「新人類」にとつて、そうでない同世代のよく似た者たちに別のタグを付す必要があった、としか言いようがない。つまり、記号論的に「差別化」するのである。そういうどこまでいっても文化記号論的問題として「差別」する対象を名付けする行為がへおたくの話の発生の理由の全てだ。かつて西欧の近代化が「文明」としての自分を肯定するために、「未開」を必要としたのと少しも変わらない。へおたくとは文化ヒエラルキーの「混

「乱」によってたまたまタグを付された者がそれを特権化しようとして提示した、文化記号論的差別用語なのである。従って「おたく」と「新人類」は実際には「よく似ている」のではなく、単に「同じ」でしかなかったことは本書に記す通りだ。だからその差異はせいぜいフアッションや体型にしか求められない。しかし、その時点で「おたく」というタグは、いわば差異を捏造して、つまり、ヒエラルキーを捏造して喜ぶ記号論的愉快犯のツールから、社会的立場を求める、つまり、新しいヒエラルキーを保証するものへと転倒したのである。ここに終章で論じる「エコシステム内の「おたく」アイデンティティ」問題の萌芽がある。平仮名の「おたく」から片仮名の「オタク」への変容は、「おたく」の「新人類」化、アイデンティティ化に他ならない。「おたく」を「オタク」といいかえることで、「文化大革命」以降のヒエラルキーの「上位」にこの階級はリセットされたのである。岡田斗司夫、東浩紀、森川嘉一郎かわかいちろうらが片仮名表記の「オタク」を何故、用いたのかはその意味で注意する必要がある。他方、ぼくたち「おたく」がことごとく大学教授の肩書きを手に入れたのも、「見えない文化大革命」がもたらした文化の劣化現象の産物である。しかし、それは日本の人文社会研究が「おたく」以下であることの証しに過ぎない。

そして、遅れてきたポストモダニスト・東浩紀が「おたく第一世代」の「冗談」をいわば真摯に受けて善意で語ったのがオタクポストモダニズム起源論であるといえる。彼らは「文

化大革命」によりピュアに参画した、一世代下の「小紅兵」の世代に喩えられるかもしれない。
へおたく」とへオタク」をめぐる言説とは、整理すればこの程度のことなのである。

このようにへおたくへオタク」論は、東浩紀の登場以前から現代思想、特に構造論、ポスト構造主義的論議との親和性を持つていた。だから当然、現在のアカデミズム的、批評的言説との親和性も高い。ぼくが八〇年代当時『漫画ブリッコ』の表紙コピーで浅田彰あさだあきらに言及したり、『アニメック』で井上伸一郎いのうえしんいちろうがフリーコやラデリダを引用して『ガンダム』を論じた記事も書く、というぼくたちの「恥ずかしい経験」は、この時代のへおたく」第一世代が、確信的なアラン・ソーカルにはなりきれなかったことを物語っている。ぼくたちは「冗談」として遊んでいたが、同時に幾許かは「本気」であり、だからこのような事態に真に批評家的には成り得なかつたのである。それがぼくたちの限界である。その意味で宮崎勤みやざきつとむの事件をきっかけに、社会の望む「おたく」のステレオタイプを演じて見せて、世間に彼を本物の「おたく」と思わせることに成功した宅八郎たくはちろうの出現だけが、未だ評価されざる確信的ソーカルの事件としてある、と批評的に語ることは可能かもしれない。

さて、こうしてへおたく」ないしはへオタク」について改めて語った時、それは八〇年代以降の現代思想や批評理論の推移に対して、ある意味で忠実である、ことを多くの人が感じるだろう。へおたく」をめぐる言説そのものが、文化のヒエラルキーの相対化や解体を目論ん

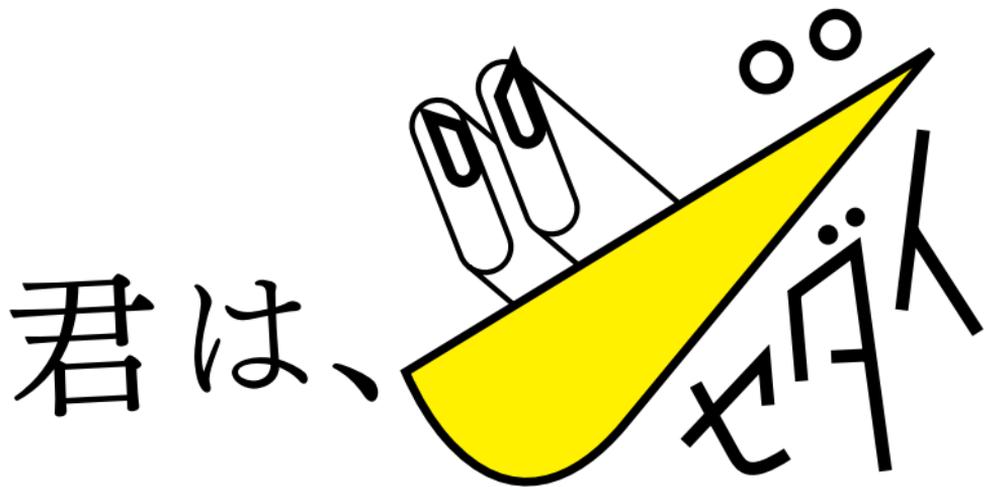
だ、当時の批評理論へのパロディでありつつ、しかし、実際に文化ヒエラルキーが本当に解体してしまったという「変容」を生むことで、その存在が批評理論的に説得力を持つようになってしまったという「ねじれ」を生んでいるからである。それが現在の「へおたく」をめぐる言説の本質だろう。「へおたく」へおたく論の語り手は今や無垢なアラン・ソーカルとしてある。そして「へおたく」自体がアカデミズムの「本気」の研究対象となることで、実は「へおたく」という存在そのものが当初、担わされていた秩序の攪乱者としての性格さえ消去されている。とはいえ、その批評性そのものがそもそもとるに足らないものであった以上、それを惜しむ意味は少しもないのだが。

ぼくはかつて「YMO」を論じた小文で、六〇年安保闘争と七〇年前後の全共闘運動の二度の「革命」の失敗の後で、八〇年代初頭に「メインカルチャーとサブカルチャーの記号論的転倒」によって無血の革命が起きたと「冗談」を書いたことがある。それは今となってはもう少し広い文脈の中で、マルクス主義が為し得なかった社会階層の相対化を二〇〇〇年代以降、ある程度、webが為し得たという事態の予見ととれなくはないが、ぼくにとってはどこまでいっても「冗談」でしかなかった。それは「物語消費論」が特権的な作者の解体と作者であることの平等化を主張しているという善意のポストモダンニズム的「誤読」が可能なのと同じことでしかない。

さて、ぼくはここで私的経験をやや偏る形でかつ露悪的に述懐したに過ぎないが、へおたくくはないしはへおたくく概念の形成史をあなたたちがどうしても検証したいなら、冒頭で指摘したように歴史的政治史的文脈が重要であるというひどく当たり前のことだけはここで強調しておきたい。へおたくく文化内部のみの検証や、そこから突然、日本文化論に飛躍する議論には全く説得力がないとぼくはここで断言する。日本のへおたくく文化そのものは慎重に脱政治化されているように見えるが、今やその担い手の一部が日本におけるネオリベラリズムや歴史修正主義の担い手でもある以上、その脱ないし非へ政治く化、あるいは脱へ歴史化くという事態に対して、現在の脱政治化、脱歴史化されたへおたくくへおたくく論が何も語り得ないの言うまでもない。

だから、もしへおたくく論者たちがへおたくくという社会階層や文化の担い手の実在をどうしても主張したいなら、一度はマルクス主義的に日本社会の下部構造の変容がいかにそれを生み出し得たのか、という説明がどこまで可能なのか、という検証が議論の一つの前提として必要であろう、とさえ思う。

へおたくく問題は日本社会の階級の変容の中に位置づけられるべき問題なのである。



君は、

ゼダイ人

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ **ジセダイイベント** 著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研 若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

会いに行ける編集長 毎週「つながる」毎月「会いに行ける」。新書出版を目指す新人と編集者による「知の格闘」を生放送！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!